



中国からの引き揚げを体験して 成城 Hさん(74歳)

日本敗戦後、中国東北部（当時の満州国）から引き揚げてきた日本人の体験談は、のちに中国残留孤児と呼ばれる現在 65 歳以上の方々の報告や話などでかなり知られています。

私は、満州の北の方に位置するハルビン市で国民学校（小学校のこと）4年の時終戦をむかえました。子供心にも強烈な印象でした。

戦争に敗けた直後は、ソ連兵がやってくるとか中国人に襲われるとかの噂で、民間の日本人達は家族ぐるみでそれぞれの職場や地域で集まって、数日間静かにしていました。この時の記憶では、どこの一家は家族全員で自殺したとか、まあ、あの人達が！などという話で、皆落ち着かなかったものです。しばらくして、ハルビンのまわりの農村部にいた開拓団の人達が着の身着のまま市内に集結してきました。後でわかったことですが、歩いてハルビンに来る途中で襲われたり子供を置いてきたりして、残留孤児たちが発生したのです。

私の父も赤十字病院の医師だったからでしょうか、不眠不休の忙しさで、収容施設を（当時の国民学校講堂や体育館など）をとび回ってヘトヘトになっていました。

祖国日本へ！

約 1 年後、満鉄（満州鉄道）の屋根のない（無蓋）貨車に荷物のように乗せられて日本に向かいました。食料は自前で用意したイリ米をかじったりしていました。数日かけて船が出る大連の近くのコロ島に到着しました。

日本に帰る汽船の中（引揚者 500 名くらい）で約 1 か月過ごしたのですが、どうしてそんなに時間がかかったのかというと、長崎県佐世保港に着いてからも伝染病患者が出たとかいうことで、日本が目の前に見えているのに 1 か月も放っておかれたのです。他の船も殆ど同様の状態でした。食べ物は 1 日 2 食の高梁（コウリャン=赤トウキビの実）のごはんだけでした。あの時は日本に帰ったらおいしいものを腹いっぱい食べたいと心から思いました。船上では当時はやった並木路子の「リンゴの歌」がすばらしくて（ラジオ放送）よく歌っていました。

昭和 21 年九州佐賀県に帰って今日まで生きてきた次第です。

国民投票法（=改憲手続き法案）

2007年（平成19年）	5月14日	成立
	5月18日	公布
2010年（平成22年）	5月18日	施行



ホントニ
真剣ニ
考テテ
クチャネ！

語り継ぐ いまだからこそあなたに伝えたい

わたしの戦争体験

戦争を体験した方々も年々少なくなっています。知らなければいけないこと、伝えなければいけないことたくさんあると思います。

あなたも語ってください。平和な世界のために。



成城地域「九条の会」

従軍看護婦として 上馬 N.Kさん(88歳)からの聞き取りによる

私が九歳の時、満州事変が起きました。1931年(昭和6年)のことです。小学校、女学校を経て、38年に日赤の甲種救護看護婦養成所に入りました。この年国民総動員法が公布されました。41年に卒業しましたがこの年に太平洋戦争が起き、私の人生の節目節目に戦争と関わる事件が起きているのです。

19歳の時、従軍看護婦として召集され、42年に台湾の陸軍病院にまわされたのをきっかけにフィリピン、マニラで働きました。43,44年になると、アメリカ軍の攻撃が激しく、傷病兵

とともに島の中を転々と移動しました。建物がある時はいいほうで、テントの中が病院になったり、医薬品はおろか食料もなくなっていきました。サツマイモの蔓や野ねずみを食料としました。私たちは看護婦として患者を治療するよりも、亡くなった兵隊さんを土に埋める仕事を優先することが多くなりました。

そんな状況のなかで或る時、空腹にたえられなくなった兵隊さんが土に埋めた死体を食しているところを見てしまいました。私は止めることもできず、その場から逃げ去りましたが、その光景はいまだに忘れることはできません。

海からのアメリカ軍の攻撃はますます激しく、歩ける兵隊さんには肩をかし、動けない人は背負って逃げました。その時の銃弾が耳元をかすめるシュルシュルという音をいまも鮮明に覚えています。戦後りんごの皮をむいている時にその音がよみがえり、全身鳥肌が立ち、ふるえがきたのです。

私はその後、幸か不幸か栄養失調になり、肺浸潤ということで44年の秋に日本に帰されました。

私の青春時代は戦争とともにありました。

もう戦争は絶対に許せません。憲法九条ができた時、これだ!と思いました。九条を大切にしていきたいです。



私の学童疎開

成城 Uさん(76歳)

開戦当時の勢いはどこへやら、戦況悪化状態になった昭和19年夏、国民学校の学童集団疎開が始まった。

6年生は受験の関係で参加せず、3年生から5年生まで希望者が地方のお寺や旅館へ先生が付き添って疎開した。私も京橋区立(現中央区)京華国民学校の5年生として埼玉県熊谷市の一乗院というお寺に行くことになった。男女それぞれ15~20名先生3人だったと思う。そこで、父が亡くなり家が空襲で焼け富山に疎開するまでの8か月ぐらいを過ごした。

“君がため”の戦争にかりたてられた若者もすでに80歳代。戦争体験が風化しようとしています。

だからこそいま、苦難の体験を次世代に伝えてもらいたいと、このミニパンフをつくりました。



められることはなかった。お寺は中央に板敷きの本堂があり、そこで住職さんから般若心経を習ったりしたので、今でも少しは覚えている。本堂の両側に広い畳の部屋があり、そこが男女に分れた子ども達の居間になった。夏は猛暑、冬は厳寒の熊谷だったが、近くに川があり、そこで遊んだり洗濯したりした。冬は小さな火鉢が1つあるきりで足はしもやけになり、ついには歩けなくなって実家に帰り医者通いをすることになった。夜になると母が恋しくて布団の中で泣いたりもした。たまにきめられた日に親達が会いに来てくれたが、途中で鉄道が止まってしまい、母は線

食事はサツマイモの方が多く御と粗末なおかずの毎日だった。急に最上級生として女子全員をまとめなければならぬ立場になり、毎日の生活に追われた。

学校は現地の小学校までかなりの道のりを毎日集団登校したが、同行した先生が担任だったので現地の子たちにいじ

路伝いに歩いて来てくれたこともあった。洗濯も思うに任せない集団生活の中で虱(しらみ)にはとても悩まされた。

秋には農家に行ってささやかな手伝いをし、お米が実る頃にはイナゴを取った。それをお手伝いのお姉さん達が佃煮にしてくれた。ご馳走だった。

子どもにはつらいことの多い毎日だったが、幸いにも心優しい先生方だったので、毎月1回お誕生日会を開いてくれ、子どもたち自身に企画を任せてくれた。こんなつらい状況の中で、せめて少しでも楽しく、という先生方の配慮だったのだろう。私たちは子どもなりに一生懸命考え、当時流行っていた「カモメの水兵さん」や「お山の杉の子」などの歌を歌ったりダンスをしたりした。もう一つの楽しみは、たまにお姉さんが作ってくれるお団子で、真中がちょっとくぼんだ小さなもので甘い蜜もついていて、そのおいしかったことは今でも忘れられない。

父が事業上のことで戦時中のルールに違反したとして2か月ほど警察に連れて行かれ、それが一因となって東京大空襲の2週間程前に亡くなってしまい、私も葬儀のために一時家に帰った。その葬儀の真っ最中に空襲が始まり、自宅の防空壕に全員避難した。爆弾が落下する時の横笛を吹くような音、それがどこに落ちるかかわからない恐れ、自分の頭上に爆弾が落ちるのを待つ恐怖は今でも忘れられない。この空襲で日本橋一帯が焼けた。一緒に学童疎開した仲間も多くは家を焼かれ、親を失い、未だに音信不通になっている。

子どもたちの命を守るための疎開と思っていたが、近年、その真意は次代の戦闘員を温存するためだったということを知った。

こんな時代は二度ときてはならないと思う。